

現今世相の上に著しく「焦燥の氣みなぎり」、「動もすれば根底なき大言壯語を喜ぶ風」がみられる時、同研究所が靜かに古典の精神を學び、篤厚の氣運を醸成せしむる事を意圖して本書を刊行せられた事は、學界、又廣くは國民と共に喜ぶべき事柄であらう。(東京、國民精神文化研究所發行、洋裝菊判、四〇一頁、非賣品(内藤)

○高野山文書 第五卷(金剛三昧院文書)

昭和七年四月、弘法大師一千百年忌遠忌を記念せむがために眞言宗曠古の事業として企劃せられたものは、今その完成を遂げつゝある眞言宗全書の刊行と、他は高野山史編纂所の開設であり、茫々千百歳に餘る一山興亡史の撰述にあつた。爾來四星霜、今その事業の基礎的工作として一山史料のあらゆる視野からの集大成を見るに至つた事は學界近時の鴻學として、その不撓の聖業に心からなる慶祝の意を表したい。蒐むる所、十八萬餘通の中、約六千餘通を厳選の上、一山各院文書八卷、舊寺領内文書四卷に種別せられ、全拾貳卷を算する浩瀚なものである。

もとより今次の刊行は叢の正續齊簡集に亞がむとせるものであり其を補はむとするものである。こといふまでもない。その文書の配列に於て叢の大日本古文書に則りて「家わけ」別を採用せられる等、その内容體裁のすべてに於て前者に進じられたるは誠に賢明の策といふべく研究に利便せらるゝ所が甚だ多い。叢の大日本古文書家わけ第一」に收められたるものが主として御影堂寶庫を中

心とせるものなるに反し、廣く一山各院の祕庫はもとより、普く全國に誇る舊高野領内にまでその探訪の手を差し延べ、以て資料蒐集の完璧を期せられた所に今次刊行の重大なる意義が考へられていゝであらう。

初回到配本せられた金剛三昧院文書には同院所管に係る御經藏文書、六卷書文書、鼻長藏文書、校倉文書等、計三百八十二通が収録されてゐる。いふまでもなく當院はその草創の當初より源家は特別の關係を有ち、秋田城介時顯自筆寄進狀を初め足利歴代將軍の御教書類等その兩者の關聯を示すもの多く、その所領、筑前粥田庄、播磨在田上庄、紀伊由良庄、播磨小真上庄等その寺領庄園に關するもの又多い。而も當院は夙に勸學院として一學僧方の柱石としてその重きをなし、證道上人、興山上人應其等一山中興祖師の資料等又豊かである。不幸屢々の祝融に禍されてその原本の大半を失へるは誠に遺憾といふべきも今縱かに殘る原本に手寫を交へて本書の上梓を見たことは慶ばしい。とまれ、報はれざるこの種事業の前途こそ誠に洋々たるものがある。折角龜勉その完成の完からむことを切望する次第である。(菊版四六一頁、圖版四、高野山金剛峯寺内高野山史編纂所發行、價各冊、五圓宛)(續中)

○日本史學史

伊豆公 夫著

「日本史學史」それは現今我國史學の領域に於て、確かに注目す

べき一つの課題であると思はれる。曾て史學史的敘述が歴史學自體の現代的反省に出發して、その最も原初的な形態を彼の史書解題に見出して以來、此の領域に對する學者の關心は漸く旺んとなり、既に數多くの勞作が世に送られて來た。

それにも關らず、「史學史を書誌的な形態から止揚せしめよ」と叫ぶ聲を屢々耳にする現状は、一體何を物語るものであるか。「史學史とは何ぞや」是こそ正に史學史の直面せる緊急の方法論的問題であらう。

本書も亦斯うした學問的意義を契機として、史的唯物論の論陣を代表すると言はれる著者が、「一定の社會的發展段階に於ける歴史觀を廣汎に眺望し、それに現れた歴史著述を、簡別的にはなく総合的に、かゝる社會的基礎の上に立つ觀念形態のあらはれとして縱横に驅使批判しつゝ、全體的な社會性階級性を剔抉すること」(一〇頁)によつて史書解題から一步前進せんとした試みである。

本書の内容上の組成は、序章、史學史の方法、第一章、現代の歴史學、第二章、「日本開化小史」における有産者性と封建性の競合、第三章、白石、宮長の對立として見たる徳川歴史學、第四章、「神皇正統記」に於ける史觀と封建主義、第五章、莊園所有著貴族の歴史、「増鏡」「水鏡」「大鏡」第六章、記紀及び古代史資料に就いて・と全部七編に分たれ、特に全體が倒敘的方法を以て敘述せられてゐる事は本書の特色とする所であるが、同時に又序章に於て著者の方法論的見解を展開させてゐる事は、此の方面の研究が現代の如く未熟なる段階にある時に於ては極めて意

義ある企てであると考へられる。

本書は著者も言ふ如く、此の領域に於ける一の試的述作である。従つて今後更に反省し、清掃せらるべき問題を内に含む事は亦止むを得ない事ではあるが、特に本書の重大なる瑕疵と考へられる點を次の三に於て挙げたいと思ふ。一その一は倒敘的敘述形態である。

凡そ通史に於ける一の著しい構造上の特色は、時の地盤に於て全體的發展を指示する事にある。曾てベルンハイムが、歴史的因素の認識はレグレッツングである事を指摘した如く、實際歴史研究の過程が逆行的である場合は考へられるとしても、之を直ちに敘述の上に表現せんとする事は極めて素朴な純眞さではないか。例へそれが時間的な全體を數ヶの時代に分割して、新しき者より、古きものへ廻行するとしても、各時代に於ける敘述は結局プログレッツングとならざるを得ない。其處には多くの冗漫な重複が發生する。

二には對象選擇の問題である。史學が何を敘述の對象として選擇すべきかは、此の種の研究の中核をなす問題であつて、此の點著者が、「階級的地盤を反映する史觀の性質を分析すること、著者又は編纂者の意圖を暴露する事、典據とすべき原本の問題、文義解釋の問題、事實の正否に關する檢討の問題」、(七頁)等「史論的及び史料の」兩面の性格を考察せんとし、又素材としての歴史書に關しては、「最も知られた、而も重要性を持つ一すなはち初學者と雖も必讀の要ある數種の歴史的古典を捉へるといふやり方」(十

頁)を採つた所には、縦ひ著者の階級的な立場を一應認容するとしても、尙多くの反省せらるべき餘地が残されてゐる。實際第二章以下の敘述に當つても、先づ著者が「必讀の書」と稱するものを選択し、其處に盛られた色とりどりの問題について思ひ出づるまゝに馳驅してゐる觀がある。是は正に堂々巡りである。本質的には著者が自ら榮ある門出の血祭に上げたものへと再び迎り着いて了つたのである。史學史とは何ぞや、清々なる立場が自學ある體系を與へるであらう事を今後の著者に期待する。

三には又、國史に對する著者の基礎的體驗である。先の史書解題が、史學史として現代から脱落した一面の理由はその文獻學的解釋に由來する理解の未熟さにあつた。近世的儒教、國學とは何か、中世的佛敎的世界觀は如何なる構造を持つものであるか、等の問題に深き理解を持つ事は、今日の史學史研究者が前進すべき一方の血路である。今は本書の細部について詳述する事は避けるが、それにしても、佛敎—宿命的因果論—末世觀といふ風な、常識の段階に於ける解釋は、十分に憤むべきであらう。

本書の根底には階級的な精神があり、古き者をたぐり寄せる立場には史的唯物論が在る筈である。著者にとつて、史學史が、問題史的な形に於て學問發展の歴史を主張する事は、果して承認すべからざる考であらうか。ともあれ本書は、日本史學史の進歩の過程に於て、一の試金石たる役目を擔ふものであらう。(自揚社發行、菊判三三三頁、一圓五〇錢)。(内藤)

## ○日本村落史概説

小野 武 夫著

我農民の生活舞臺たる村落の研究は國民經濟史上に於ける重要題目であるばかりでなく、目前の農村問題、殊に農村經濟の共同組織化運動の歴史的智識として大なる使命を帯ぶるものである。故に日本村落の概念的記述は一方銘々の郷土に於ける天然的、社會的並に經濟的事物に對する認識力を高めしめると共に其認識によつて得たる智識を如何に農村實生活に應用すべきかを示す役にも立つものでなければならぬ。——著者は本書の冒頭に於いてかやうに述べてゐる、まことに現今に於けるあらゆる問題はその解決の方法を歴史的なる智識の中に求められようとしてゐる中にもその要求の我が農村問題に於けるが如く切なるものは少いであらう。蓋しそは單に少數爲政者の必要たるばかりでなく實に國民の大多數が等しく自個自身の問題として解決を迫られてゐる問題であるからである。この書はかやうな一般の要望に應へんが爲に著者が諸方に於て試みた講演を機縁として書かれたものであつて、その全體は左記の六編より成つてゐる。即ち一、政治村落史、二、自然村落の發生、形態、組織並に生長、三、村落の共同生活様式、四、村落文化の交流性、五、明治維新と村落制度、六、村落生活十考の六つであつて、その講述の態度は、著者の以て村落史學の三方面とするところの社會經濟史學、地理學及民族學の三者いづれの方面にも偏することなく、よくそれら各方面の既往の研究業績